

校訓の制定

昨日、校訓制定式を行いました。校訓制定委員長である中部地区自治協の河野会長から、校訓は、校歌の歌詞から「高い理想、清い心、熱い想い」に決定したことの発表がありました。校歌の作詞者、河野佐千子様が河野会長のお子さんであることは、何かの巡り合わせだと思えます。本日付けの「校長だより」より、タイトルを校訓に変更しました。今後は、令和3年度の創立20周年記念式典時の校訓碑除幕式へ向けて準備を進めていく予定です。現在の児童・保護者・職員のみならず、卒業生及びその保護者、元職員、地域の方々にとっても愛される校訓になることを期待しています。

ご多用の中を校訓制定式へご出席いただいた方々へ、感謝とお礼を申し上げます。

交通事故防止

市内では、子ども（特に低学年）の飛び出しによる事故が後を絶ちません。本校でも、ふざけながら登校している子が、歩道から車道へ降りたという事案があります。幸い車との接触はありませんでしたが、大けがにつながっていた可能性もあります。「飛び出し禁止」を含め、車や崖、溝などに注意して安全に歩行するよう、ご家庭でもご指導ください。

祇園歴史の旅（その49）「江戸時代の佐世保、平戸往還（街道）と佐世保」

佐世保市教育委員会編集・発行 小学生向け歴史副読本『ふるさと歴史めぐり』2016年 第6版（改訂版）から引用。

「1603年（慶長8）に、徳川家康が将軍になって江戸幕府を開き、江戸時代が始まります。これから約260年の間は、世界的にも珍しい平和な時代が続くのです。幕府は全国の大名を支配し、大名は領内の人々を支配しました。大名は、裁判や年貢の徴収などを行う役所を領内各地に置きました。佐世保を含む地方の役所（相神浦筋郡代役所）は、初め中里にありましたが、江戸時代末期に谷郷町に移転しています。現在の谷郷町バス停近くにありました。

江戸時代には、全国に街道が整備されました。江戸を発した東海道や中山道は、京都を経て、山陽道につながり、瀬戸内を西に向かいます。九州に入ると長崎街道となり、幕府の直轄地だった長崎が終点でした。この主要街道からは、無数の小さな街道が枝分かれして、道は全国に網の目のように張りめぐらされていたのです。

佐世保にもそのうちの一本が通っていました。『平戸往還』です。平戸往還は、江戸時代の初め頃にできた道で、平戸藩主も参勤交代などで通りました。平戸から佐世保や早岐を通り、東彼杵で長崎街道につながっていました。つまり、佐世保から江戸まで一本の道でつながっていたのです。この頃の佐世保は、往還沿いの宿場町のひとつとなっていました。俵町から城山町を通った往還は、八幡神社の東側を回り、西方寺の山門前付近で、宿場の中心だった元町へ向かう道が別れていたようです。元町付近には、本陣や庄屋、寺（教法寺）、旅籠（旅館）などが立ち並んでいました。教法寺から佐世保川を渡り、相生町の旧相生市場（現エレナ）までの道は、当時の往還と同じ場所を通っています。

当時、本陣が置かれていた庄屋の山本家を訪れた、平戸藩第9代藩主の松浦清（静山）公、第10代藩主の松浦熙（観中）公は、座敷の襖に、休息や宿泊した年月や天候、窓から見える景色のことなどを自筆しています。この襖は後に屏風に作り変えられ、今も山本家に伝えられています。当時の佐世保の様子や、大名行列の速さなどを知ることできる貴重な資料で、佐世保市の文化財に指定されています。平戸往還は、西方寺から谷郷町、中央公園の丘を過ぎ、名切の谷からさらに丘（櫛山）を越えて裁判所裏手を光月町に抜けまします。そして、松川町から、この付近最大の難所である『峰ノ坂』を、山祇神社まで一気に100メートルの高さまで登り、駕籠立て場から須田尾町の茶屋ノ坂を下って、藤原町の一里塚に至ります。

ところで、参勤交代の大名行列は、一日にどれくらいの距離を移動したのでしょうか。山本家に残る屏風には、『朝、江迎本陣を出発して昼食を佐世保本陣でとった』という記録があります。この日は早岐本陣に泊まったと思われるので、一日におよそ30キロメートル移動していることとなります。江迎から早岐までの間には、長坂、峰ノ坂といった急坂が多いことを考えると、これはかなり速いペースといえるでしょう。」

<コラム>～「往還」と「街道」～

「平戸往還」は「平戸街道」とも呼ばれている。どちらも間違った名前ではないが、正確には「往還」である。両者の最も大きな違いは道幅にある。平戸往還は道幅が1間（約1.8メートル）しかないが、長崎街道は倍の2間（約3.6メートル）の道幅がある。これは長崎街道のほうが、格段に交通量が多いためである。また、街道は荷車で、往還は馬の背に乗せる荷駄で荷物を運ぶため、街道は荷車が行き違える2間の道幅が必要となるが、往還は荷駄が行き違える1間の道幅で十分だったのだ。長崎街道は荷車を通るため、山を迂回する緩やかな道が多くなっているが、荷駄を使う平戸街道では、山を迂回せずに真っ直ぐ登り、下って最短距離で目的地に着けるようにしてある。そのため、急な坂道が多くなっている。

次回は、「海軍の街・佐世保」と題して、明治時代の発展をご紹介します…。